

【結語】 high volume center でない施設であっても、症例を選択することで、PD 術後早期のドレーン抜去が可能であった。ドレーンの早期抜去が術後腹腔内感染や膵液瘻の発症を減少させることが追試出来た。

#### 【参考文献】

- 1) Bassi C, Dervenis C, Butturini G, Fingerhut A, Yeo C, Izbicki J, Neoptolemos J, Sarr M, Traverso W and Buchler M: Postoperative pancreatic fistula: An international study group (ISGPF) definition. *Surgery* 138: 8 - 13, 2005.
- 2) Molinari E, Bassi C, Salvia R, Butturini G, Crippa S, Talamini G, Falconi M and Pederzoli P: Amylase value in drains after pancreatic resection as predictive factor of postoperative pancreatic fistula. Results of a prospective study in 137 patients. *Ann Surg* 246: 281 - 287, 2007.
- 3) Kawai M, Tani M, Terasawa H, Ina S, Hirota S, Nishioka R, Miyazawa M, Uchiyama K and Yamaue H: Early removal of prophylactic drains reduces the risk of intra-abdominal infections in patients with pancreatic head resection. *Ann Surg* 244: 1 - 7, 2006.

#### 14 NPPV を用いた肝胆膵悪性腫瘍術後の呼吸管理

野村 達也・土屋 嘉昭・梨本 篤  
佐藤 信昭・藪崎 裕・瀧井 康公  
中川 悟・丸山 聡・神林智寿子  
金子 耕司・田中 乙雄

県立がんセンター新潟病院外科

高齢者や低肺機能症例などの肝胆膵悪性腫瘍手術症例が増加している。NPPV（非侵襲的陽圧換気）はうっ血性心不全、慢性呼吸不全や術後呼吸不全にも推奨されている。2008年4月から2009年5月までの肝胆膵悪性腫瘍手術140例中、術前ハイリスク症例や術後呼吸不全症例7例にNPPVを使用した。膵頭十二指腸切除2例、膵体尾部切除1例、肝拡大葉切除・膵頭十二指腸切除2例、肝左三区画切除1例、胆嚢癌根治術1例。4例に血行再建施行。4例に大量輸血施行。NPPV導入の理由は、術前から塵肺、喘息、胸水など低

肺機能3例、術後P/F ratio低下4例、高度肥満1例。装着期間は1日から5日間。全症例において呼吸不全の増悪や気管内挿管の必要はなく軽快した。NPPVは肝胆膵悪性腫瘍手術の術後管理に有用である。

#### 15 膵胆道癌に対する胆道ドレナージ下の化学療法の経験

宗岡 克樹・白井 良夫\*・佐々木正貴  
若井 俊文\*・坂田 純\*・神田 循吉\*\*  
若林 広行\*\*・畠山 勝義\*  
新潟医療センター病院外科  
新潟大学大学院医歯学総合研究科  
消化器・一般外科学分野\*  
新潟薬科大学薬学部臨床薬剤治療学\*\*

【目的】膵胆道癌に対する化学療法を前提とした胆道バイパスについて検討する。

【方法】2005年1月以後、化学療法を施行した切除不能膵胆道癌13例を対象とし、PPPD後再発7例と比較検討した。原発は肝外胆管11例、膵臓3例、乳頭部3例、肝内胆管3例であった。13例中のpalliative surgeryは胆道バイパス8例、胃空腸吻合2例であった。黄疸（T-Bil, 3 mg/dl以上）や胆管炎を合併した症例では、胆道ドレナージ下に化学療法を施行した。化学療法の期間は4～44か月であった。

【結果】胆道ドレナージ下に化学療法を施行した症例は13例中9例（PTCD7例、ステント4例）であった。化学療法後に胆管炎を来した症例は胆管原発の切除不能9例中6例で、膵臓原発やPPPD後には認められなかった。胆管内進展を来した9例中5例で、PTCD内の胆汁に壊死物質や乳頭状腫瘍の排泄が認められた。PTCDに比して胆道バイパスでは、胆管炎の頻度は有意に低値を示した（ $p = 0.001$ , Fisher検定）。胆道ドレナージ後3～22ヶ月間化学療法が可能であった。

【結論】胆管内進展をきたした胆道癌の化学療法では、胆管炎を繰り返す症例がおおく、胆道バイパス可能な症例では、バイパス後の化学療法が望まれる。